Japaneseman In NY（ニューヨーク生活）

Photo by Tsuneo Koga ／写真提供：ブルーノート東京

≪ R.I.P. RH ≫

日本時間の 11 月 3 日の深夜、突如ニューヨークから悲しい知らせが舞い込んできた…。それはジャズ・トランペッターのロイ・ハーグローヴが息を引き取ったというニュースだった。享年 49 歳。若過ぎるとかそういうことでなく、とにかくショックで、暫く呆然としてしまった…。

ロイ・ハーグローヴと自分のニューヨーク生活はかなり密接というか、彼とは同じ 1969 年生まれだったこともあり、常に注目していた気がする。同じ 1969 年のジャズマンではジョシュア・レッドマンがいるが、ロイとジョシュアは自分にとって憧れのような存在でもあった。

90 年代前半～中頃、ロイの姿は自身のリーダーライヴ以外にも、ニューヨークのジャズ・クラブで行われていたジャム・セッションに飛び入りする姿をよく見かけた。当時 20 代前半から半ばだったが、既に独特のオーラがあった。実物のロイは小柄だったが、プロボクサーのような鋭さもある反面、お洒落でクールさも持ち合わせていた。あの佇まいはロイならではだった。1993 年のアルバム『Of Kindred Spirits』や翌 1994 年のアルバム『With The Tenors Of Our Time』の頃のロイはニューヨークでリアルタイムで見ていたので特に思い出深かった。

その後も自身のクインテット、ビッグバンド、RH ファクター等、3 つのバンドのリーダーとして活動する傍ら、アルバムもコンスタントに発表してくことになるが、ニューヨーク生活から引き上げた 90 年代後半を機に、ロイのアルバムを積極的に聴くことはなくなってしまった。はっきりとした理由があるわけではないが、一時期ロイがドレッドヘアーにしてた時代があったが、ストレートなジャズから離れていってしまうような印象を受けたのかもしれない。

だがその後、ロイがまた短かに感じられる瞬間が訪れる。2016 年にニューヨークで活動していたジャズ・ピアニストの海野雅威さんが、ロイのクインテットに史上初の日本人レギュラーメンバーとして迎えられたのだ。

海野さんには 2013 年に本誌インタビューに登場してもらったこともあり、定期的に連絡を取らせてもらっていたが、誇りに思うと同時にロイのクインテットで躍動する海野さんの姿は自分が叶わなかった夢のようにも感じてもいた。

ロイは突然逝ってしまったが、この悲しみを乗り越えて行かねばならないし、ジャズという音楽は先人の魂を受け継いで行く音楽だと思うので、海野さんはじめ、それぞれのアーティストがロイの音楽、ロイのジャズ、ロイの魂を次世代に伝えて行って欲しいと願っている。

自分は The Walker's を通じて、ロイの魂を伝えて行きたい。